

唯物論についての覚え書（その二・終）

阿部 矢 二

三 唯物論と物自体

四 史的唯物論

——生産関係と生産力との照応——

五 イデオロギーの党派性と客観性

三 唯物論と物自体

物質を本源的な存在と認め、意識を物質の頭脳における映像であるとするのが唯物論の根本的立場であるが、この立場に立つものにとっては、感覚によってとらえられる対象・物質がなければその映像としての意識もあれない、という考えほど当然な考え方はない。人はその意識できないものについて、どうして思惟することができようか。唯物論のこのような根本的な立場は、素朴な主観的観念論者か宗教の盲信仰者かでなければ無下に否定し去ることはできない。

ところが、右のような唯物論の立場を一応は認めながら、人間の感覚にたいする不信にこだわったり、あるいは

わ人間の認識能力には限度があるといひだしたりして、結局、感覚によってとらえられる物質界とそのほかの世界との存在を認めるというかたちで、唯物論を認めてこれを否定してしまふ観念論——不可知論——がいろいろな姿をとっておこなわれている。

彼らは、われわれの感覚が果して、それによって知覚された事物の正しい模写をわれわれにあたえてくれるかどうか、それをわれわれはどこから知るのであるうか。と疑う。そして、さらにすすんで、われわれは物やその性質がわれわれの感官にあたえる印象について話しているだけで、「物自体」については確かなことは何一つ知ることとはできない「不可知」なのだ、と主張する。¹⁾不可知論について平凡社版「哲学事典」によってみると次のようである。

「われわれが眼前に見る外界や現象は、認識主観が与えられた感覚内容を綜合成した物であるから、物自体 (Ding an sich) ではない。物自体はむしろこの現象の起原となるもの、それ自身は現象せず、ただ感覚に感觸 (affizieren) されたかぎり認識できる不定なある物 (x) である。」

「不可知論 (Agnosticism) は本体的世界⇌実体的世界⇌物自体と現象的世界とを区別して、われわれが認識することのできるのは経験的な現象的世界だけであり、実体的世界は認識のそとにある不可知の領域であるという立場をとっている。不可知論の代表的論者の一人、スペンサー Herbert Spencer (1820—1903) は実体的世界の存在を主張しながらも、人間の知識は現象界にかぎられていて実体的世界にまでは及ばない、われわれにとつて実体界は不可知の世界にすぎないと主張した、つまり有限で相対的な経験の世界に無限で絶対的な本性の世界を対立させているわけであつて、宗教の世界、神の世界、第一原因の世界などが、かれによればそのような実体

界に属する。そしてこれら本体または実体の世界は時間、空間、運動、物質、精神などのすべての根源をなすものであって、このような本体が存在しなければ現象の世界に属するいっさいのものは発現しえないというのである。」

感覚、知覚とその対象——横写と横写されるもの——との不一致、不照応についての不可知論からの疑惑にたいして、唯物論の立場からの答は次のようである。

「対象的真理が人間の思惟に到来するか否かという問題は、何等理論の問題ではなく、一の実践的問題である」(前出)

人間の感覚・認識は、個々の場合についてみれば、必ずしも常に正しく物質・外界の性質やその内部の関連を反映したものではないとしても、その本質としてはそれらを正しく反映しないものでは断じてない。人間はその感覚と感覚をつうじて得た経験や知識にたより、導かれて生活してきたのであり、現にそうしている。もし、人間の感覚が本来あてにならないものであり、脳髓に写しだされる映像が外界の正しい姿ではありえないとしたならば、人間は何にたよって生活を正常的に維持発展させていくことができようか。

人間は発生以来今日にいたるまで、たとえば、食生活の実践、ものをたべてみることによって——味覚嗅覚視覚等の感官にたよって——食物のうちから毒物を排除してきたのであり、かかる食生活の何十万年かの実践過程で毒物についての客観的な正しい認識・毒物化学を獲得するにいたったのである。毒物についての知識の科学性・客観性は、実験・実践によって誤りなく証明されるが、その証明はとりもなおさず人間の感覚と感覚を通じて写される物質の映像の正しさ——感官が吾々に物の正しい映像をあたえるということ——の証明である。この点に

関してエンゲルスは次のように説明している。

「吾々が、これらの物を、これらにおいて、吾々の知覚するところの諸性質におうじて、吾々みずからの用に供する瞬間に、まさにそのしめすところの正当であるか不当であるかをまちがいに吟味証明しているのである。そしてこの知覚がもし不当であったならば、こうした知覚をあたえる物をもちいよとした吾々の判断もまた不当でなければならぬし、その物をもちいよとする吾々の企図は、失敗せざるをえないのである。

けれども、もし吾々の目的をたつするならば、すなわち、物についての吾々の表象に適合しており、またこの物が、吾々のこれをもちいた目的をはたしている、ということ吾々が発見するならば、そのときには、そのことは、このかぎりにおいて物とその性質とにかんする吾々の知覚が吾々のそこにある現実と一致している、ということを経極的に証明する。」²⁾そして彼は結論として「今日までに知られているかぎりでは、吾々の科学的に統一御された感官知覚が吾々の脳髓のうち外界についてうみだすところの表象が、その本性上外界の現実とはちがっているとか、あるいはまた、外界とそれについての吾々の感官知覚とのあいだにある生得的な不一致が存するとかいうような結論に吾々がおいこまれたことは、ただの一度もない。」³⁾といきまっている。すなわち、物とその脳髓における映像との一致照応の問題は、何等「理論の問題」ではなくて「実践的問題」なのである。

次に「物自体」とその「不可知」についてはどうであろうか。不可知論者は吾々の認識未到の領域を「物自体」と称して空想的に「不可知の世界」につくり変える。物自体は本体の、神の世界であり、人間の感覚、知覚によつては認識することのできない「不可知」の世界である。不可知論者はこのような不可知な「物自体」を可知的な経験世界に対置することによつて、結局、神を物質に対置し感覚による外界の認識に限界を設け、認識がその

限界を超えることの不可能を説く。

これにたいして、唯物論の立場にたつものは、意識され知覚される物や世界そのものが、同時に不可知の「物自体」であったり、現象とはことなる「本体」であったりすることを拒む。われわれは感覚にたより、実践によって検証しつつ、物の諸性質とその内部的関連についての法則を認識することができる。したがって、われわれのこれらの認識によって得られた知識は客観的真理である。もちろん、人間が現在までに到達し得た認識の水準が最高の水準であり、その知識が絶対唯一の真理だということではない。人類の認識は無限に続く生活の実践を通じて、不断により、広くなり、より、深くなりつつ、絶対的真理により、近接してゆくという性質のものであり、レーニンのいうように「真理は過程」なのである。

「いいかえれば、思惟の至上性は、きわめて非至上的に思惟する人間の系列をつうじて実現され、無条件的真理要求をもつ認識は、相対的誤謬の系列をつうじて実現される。すなわち、前者も後者も、人類の無限につづく生存をつうじるのでなければ、安全には実現されることができないのである。」⁴⁾

それゆえわれわれは、人間のもっている知識、科学が未熟で不完全なものであることを当然とめるが、だからといって、われわれが現にもっている知識の客観性真实性を疑ったり、感覚知覚の不可浸透領域——不可知の本体・物自体——を仮想したりする必要をみとめることはできない。人間の生活の永久を、したがって認識における永久の前進を、信ずるものにとつては、絶対不可知の世界は存在しない、いつかは認識されるがただ現在では認識のこされている部分——未知の領域——の存在を認めるだけである。かくして「物自体」の前に唯物論の立場がたぬかれる。

不可知論は、われわれに感覚においてあたえられている客観的实在・物質の根源性の否定である。それだから不可知論者は物質のほかに「神の世界」「第一原因の世界」「物自体」などの仮想的存在を必要とし、この仮想世界をもって「物質、精神などすべての根源」だとする信仰主義・観念論に転落しおわる。唯物論の保留条件つき承認の真相は、すべてかくのごとくである。彼らの本音は「信仰と知識は互に補足しあつて真の世界の認識に到る。」「前出「哲学事典」不可知論の項参照）であり、さらに最近アメリカにおけるプラグマティズムの主観的、不可知論的な正体——その信仰主義的無理論——は「われわれは未知の未来に直面し、ゆきつく先はわからない。好むと好まざるとにかかわらず、変化というものを認めて、それに適応してゆくことが、これに処してゆく唯一の道である」という言葉によって暴露されている。⁵⁾（キルパトリック「変転する文明に処する教育」一九二六）これらの不可知論の一群の観念論哲学の手引する方向はナンセンスか信仰主義であると指摘して、レーニンは次のような警告を發している。

「諸君がひとたび、吾々に感覚において与えられている客観的实在を否定するならば、諸君はすでに信仰主義に対抗するあらゆる武器を失う。何故なら諸君はすでに不可知論又は主観主義に転落するのだが、信仰主義にとつてはただこれこそが必要なのだから。」⁶⁾

人間の意欲や願望などから独立に存在し、それ自身の法則によって運動する外界にたいする認識の正しさ、その科学性は、結局においては人々の「社会的存在」によって規定される。だから、階級社会においては人々の階級的利害が社会にたいする彼らの認識を「信仰主義」的に、あるいは唯物論的に決定する。人々はその将来を如何ようにも信仰することができよう、だが、客観的法則は信仰の自由からは自由に自己を貫徹させるであろう。

(1) エンゲルス「空想から科学への社会主義の発展」一八九二年英語版序文・マルクス・エンゲルス選集・第十四卷 五四

頁国民文庫版「空想から科学へ」 二六頁

レーニン永田広志訳「唯物論と経験批判論」第二章参照

「全自然界は法則によって支配されていて、外部からのいかなる影響をも絶対に排除する。ただし吾々には、吾々に知られている世界のかなたにあるなんらかの最高実在が存するか存しないかを証明することは不可能である。」マルクス・エンゲルス選集・第十四卷 五八頁

(2) (3) マルクス・エンゲルス選集・第十四卷 五五頁

「われわれの知覚や表象は物の形象である。この形象の吟味、真なるものと虚偽なるものとの見分けは、実践によってあたえられる。」(同書)

(4) 右同書「反デューリッゲ」一九二頁

(5) 季刊「マルクスレーニン主義研究」一九五・五・第五号九〇頁・園生昌三「プラグマティズム哲学の批判」参照

(6) レーニン永田広志訳「唯物論と経験批判論」五一四頁

四 史的唯物論

——生産関係と生産力との照応——

唯物論の根本の立場はすでに述べたとおり、物質を一次的・客観的実在、意識を物質の反映、したがって、二次的、派生的なものと認める点にある。

唯物論のこの根本的認識に調和させることによって、社会に関するすべての学問に科学的研究の方法をあた

え、これを自然科学と同等な客観性をもつところの科学として再建したのはマルクスとエンゲルスとである。史的唯物論はひと口に、唯物論の理論の人類社会の歴史への適用だといわれるが、それは結局「観念的なものは、人間の頭の中で転変され翻訳された物質的なものに他ならない。」¹⁾ という唯物論の根本的認識をもととしたところの、人間の社会的生活の歴史を把握するための原理なのである。この関係をレーニンが次のようにいつている。

「唯物論は総じて意識を存在から説明するものであってその逆でないとするならば、唯物論は、人間の社会的生活へのその適用においては、社会的意識を社会的存在から説明することを要求する。」²⁾

一八四二年から四三年のあいだに「ライン新聞」の主筆としてマルクスを「はじめて当惑」させたのは「いわゆる物質的利益にかんする論争に参加せざるをえなくなったとき」³⁾であったが、この「当惑」——それはおそらく物質的利益と人々の見解との関係についての問題にからまるものだったろうが——に解決をつけるということがひとつの契機となって、彼の研究はつぎのような結果に到達した。

「すなわち、法律諸関係ならびに国家諸形態というものは、それ自体によって、またいわゆる人間精神の一般的发展からも理解されるものではなく、むしろそれらは、物質的な生活諸関係——それらの総体をヘーゲルは十八世紀のイギリス人とフランス人の先例にならって「市民社会」という名称のもとに総括している——に根拠をもっているということ、だがこの市民社会の解剖はこれを経済学のうちにもとめるべきである、ということであった。」⁴⁾

右「経済学批判」の「序言」からの引用で、すでに唯物論の社会生活への適用の骨組がわかる。すなわち、そ

ここでは「意識から存在を」でなく「存在から意識を」説明するという唯物論の理論が「法律諸関係、國家諸形態」は「人間精神の一般的發展」からでなく「物質的な生活諸関係」から理解されるべきだとかたちになつて貰かれている。この理論はいわゆる史的唯物論のテーゼのうちで次のように一般的原则化されている。すなわち「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」⁵⁾と。この考えかたは、すでに一八四七年に書かれた「共産黨宣言」のうちにおいても見られる。「人間の生活關係、その社會關係、その社会的存在とともに、人間の觀念、見解、概念、一言でいえば、人間の意識もまた變化するということを理解するに、ふかい洞察が必要であらうか？」

思想の歴史がしめすものは、精神的生産は物質的生産とともに變化する、ということよりほかないではないか？⁶⁾

この「宣言」についてレーニンはその著「カール・マルクス」——資本論第一部三三頁参照——のうちで次のようにいつている。すなわち「この著述では、天才的な明白さと平易さをもって、新しい世界觀が、首尾一貫した・社會生活の領域をも包括する・唯物論が、發展にかんする最も多面的で最も深遠な學說としての弁証法が……叙述されている。」と。

かくして、このような認識の基礎の上に立てば、人々の人格ないし意識、そのほかの諸觀念は、それ自体として孤立的に問題にされたり、解釈されたりすべきものではなく、それらの人々が例えば資本家ならば、資本という經濟的範疇の「人格化」として、資本家階級およびその利害關係の担い手として、すなわち、彼をブルジョアとして、彼をその社会的存在の「被造物」として、彼の人格が、彼の意識が取りあげられ解釈されねばなら

ないのである。⁷⁾

人間の意識とその社会的存在との照応関係、その唯物論的認識は、社会を経済的構成体という概念でつかむにいたらせるひとつの重要な基礎となっている。この経済的、構成体の土台をなすものは、人々が物質的生活——生産と交換——において相互に結びあう諸関係——生産関係の総体——であり、この土台の性格に照応して社会体制——法律のおよび政治的な上部構築——と社会的意識諸形態とが形成される。⁸⁾

経済的構成体としての社会の存在の基礎、土台は、物質的な、したがって、人間の意識から独立した客観的存在であるという認識をもとにして、社会科学、ことに歴史科学としての経済学は、はじめて真の客観性・科学性をもつものとなった。唯物史観のテーゼの書きだしにそれがある。

「人間は彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係を受容する。」⁹⁾ 人々の意思から独立した諸関係について、レーニンは次のような解説をたえている。

『物質的社會關係へすなわち人間の意識を通過しないで形成される關係、——人間は生産物を交換することによつて生産關係にはいりこむが、ここに社会的生産關係があることを意識さえしないで、そうするのである』¹⁰⁾

マルクスが経済学において研究の対象としたのは、資本主義社会に特有な生産關係だけであつて、彼は生産關係を研究するにあつて、経済的・外的現象としての生産關係以外に何物をも加えなかつた。これは、事物のうちから理論、法則がみちびきだされる、事物・外界は理論や法則の検証である、という学究に際して弁証法学者の守るべき法則のマルクスによるひとつの実践例ともいふべきことがらである。レーニンもその著「ロシアにお

ける資本主義の発展」(レーニン全集第三卷・四〇頁)のうちでいっている。「経済学が研究するのは、けっして生産ではなくて、生産の面での人と人との社会関係、生産の社会制度である」と。資本主義社会の土台である生活関係は、いうまでもなく、人間の観念の作つたものではない、それは人間の観念にはかわりのない、物質的、外的、客観的存在である。

だから、生産関係の分析によってそのうちから見だされた法則——社会の経済的運動法則——およびそれに従つておこる社会の運動——社会の発生・発展・死滅・およびより高級な社会による交替——は、人々の意思・意識から独立している客観的法則であり、また、自然史的過程と考えられる運動である。マルクスは自分の研究についての立場を「経済的な社会構造の発展を一の自然史的過程と解する」¹¹⁾ものだといっている。

社会の存立の土台・生産関係の性格に規定され、それに照応して、特定の社会体制、国家形態、イデオロギーの諸形態——いわゆる上部構築——が成生されるのだという考えかたは、意識をもつて物質の反映だとする唯物論の根本的認識の拡充にはかならない。この認識は、反映されるもの——物質——が変化すれば、その反映・映像——意識——もまた変化するということの認識を当然含んでいる。だから、社会の土台の変化とともに、「経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構築が、あるいは徐々に、あるいは急速に、¹²⁾変革される。」という社会変革についての史的唯物論の理論がみちびきだされるのである。

史的唯物論は、かくのごとくして、社会の運動・歴史を規定する法則を社会の物質的諸条件・諸関係そのものうちにみいだしたのである。その結果、人類の歴史は人々の意思、野望、思想などの観念的なものによって、いわば、人々の恣意によって、無原則的に動かされるものではなく、客観的諸条件・諸関係のうちに存する法則

にしたがって、人々の意思からは全く独立して、合法的・必然的に一定の軌道の上を進むものだということが立証されたのである。¹³⁾

さらに、「生産諸関係は生産力の性格にかならず照応する」という法則も事物のうちに客観的に存するのであり、史的唯物論の基本的テーゼのひとつである。生産諸力のうちでは、生産の担い手勤労人民が主力であるという事実からして、社会的生産力はずねに可動的であり、かつ向上線にそって発展的であり、進歩的である。これにたいして生産関係の方は、階級社会においては特にそうだが、社会秩序の土台としてのその性格上、静的・現状維持的・保守的であることをまぬかれない。生産力と生産関係とのこのような性格的な相違は、生産力の発展がある特定の段階にいたると両者の間の矛盾となつて現れざるをえないようになる。ある程度発展した生産力にたいしては、現存の生産関係が照応しなくなる。これは社会的生産諸力の発展過程から生じる必然の矛盾である。

ところが、一方には、生産諸関係は生産力の性格に「かならず」照応するという必然がある。この二つの必然のあいだの矛盾はどう解決されるかといえ、それはづねに発展的に、進歩の方向にそつてである。抗しがたいものは新たに生れ出るものであり、抑えがたいものは伸びよう、発展しようとするものの力だ。だからして生産力のより以上の発展に追従してそれに照応することができなくなったところの生産諸関係、生産力の発展を妨害する桎梏化した生産諸関係、その歴史的使命と役割をおえた生産諸関係は、歴史の舞台からしりぞくことを要求されているのである。そして、このような段階では、それに代るべき新しい、より高度の生産諸関係にとつての物質的な実存諸条件が、現存社会のうちで成熟しているという事実がある。かくして、新しいものの誕生

は、すなわち、古いものの死であり、それらはひとしく合法的であり、必然的であるといえるのである。新しいものの誕生と古いものの死滅について「哲学教科書」のうちでは次のように記述されている。

「いっそう進歩的なあたらしい社会制度のための条件が積みかさなってくると、どんな力をつかっても、その生命をおわつたふるい社会秩序がほろび、これにかわるいっそう進歩的なあたらしい社会秩序があらわれるのをくいとめることはできない。あたらしいものの誕生とふるいものの死滅は、それにさきだつ發展全体に条件づけられており、客観的な歴史的法則性をなすものである。」¹⁵⁾

「唯一の科学的な歴史観」¹⁶⁾といわれる史的唯物論は、物質的社会関係・生産諸関係の分析によって、生産関係と生産力との照応に関する法則——社会の運動法則——を発見した。そして、この法則の客観性・科学性——客観的存在の内部的構造と関連とを正確に反映したものだということ——はすでに現在までの歴史によって検証されている。雑多な歴史観をことごとくしりぞけ、史的唯物論をもって「唯一の科学的な歴史観」とするのは決して誇称ではない。レーニンは史的唯物論の方法を次のように要約して示した。

「……社会関係を生産関係に還元し、そして、この生産関係を生産力の水準に還元することだけが、社会構成体の發展を自然的過程として考えるための強固な基礎をあたえた」¹⁷⁾と。物質と意識との関係について「観念の行程は事物の行程に依存する」¹⁸⁾とする唯物論の根本的認識が、社会の歴史過程に適用されたもの、それが史的唯物論と呼ばれるものとなったのである。

(1) 長谷部文雄訳「資本論」第一部・上「第二版への後書き」八六頁

- (2) 長谷部文雄訳「資本論」第一部上「カール・マルクス」（レーニン）四一頁
- (3) マルクス「経済学批判」大月書店版・マルクス・エンゲルス選集補巻3 二頁
- (4) 右同書 二一三頁
- (5) 右同書 三頁
- (6) 「共産党宣言」前出マルクス・エンゲルス選集第二巻 五一三頁
- (7) 前出「資本論」第一版への序言 七三頁参照
- (8) 前出「経済学批判」三頁参照
- (9) 右同書 三頁
- (10) 「人民の友とはなにか」大月書店版・レーニン全集第一巻 一三三頁
- (11) 前出「資本論」七三頁

「マルクスは社会の運動をば、諸法則——すなわち、ただに人々の意志・意識および意図から独立しているばかりでなく、むしろ逆に人々の意志・意識および意図を規定するところの諸法則——によって支配される一の自然史的な過程と考えている。」「資本論」——第二版への後書き——八四頁）

(12) 前出「経済学批判」 三頁

- (13) 「史的唯物論は、はじめて、自然史的正確さをもって大衆の社会的生活諸条件ならびにこの諸条件の変動を研究するといふ可能性を与えた。」（前出「資本論」四二頁）

(14) 「物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係」（前出「経済学批判」三頁）

ソ同盟科学院経済学研究所著・マルクス・レーニン主義普及協会訳「経済学教科書」八頁

- (15) ソ同盟科学院哲学研究所・ゲ・エフ・アレクサンドロフ著・古在由重・森宏一訳「弁証法的唯物論」第一分冊（青木新書）二二七頁

(16) 前出「人民の友とはなにか」一三五頁

(17) 右同書 一三三頁

(18) 右同書 一三二頁

『註』(19)と関連して、物質と意識、觀念の關係は史的唯物論のかたちで左のようにも表現されている。「吾々の法律的・哲學的・宗教的諸觀念が、一定の社会で支配的な力をもつ經濟的諸關係から間接的ないし直接的にわかれた若枝であるならば、これらの諸觀念は、これらの經濟的諸關係が根本的に變化したのちまで、なごらくもちこたえられたものではない。」(エンゲルス「反デューリング論」大月書店版・マルクス・エンゲルス選集第十四卷・七七頁)

五 イデオロギーの党派性と客観性

私有財産制をとるすべての社会の歴史は、階級闘争の歴史であるといわれる。何故かというに、階級社会においては「生産關係の生産力への照応」の法則は、被抑圧・被搾取階級の支配・搾取階級にたいする反抗とその勝利なくしては実現されえないからである。

階級社会の生産關係は、財産の私所有とそれにもとづく労働の搾取の諸条件とを中心とするものだから、この社会での物質的生産ならびに精神的生産のうちには、搾取・被搾取階級の利害対立、敵対性が恒存する。それで、生産諸關係を現実の物質的土台として、その性格に必然に照応するようにできている「法律のおよび政治的な上部構築」と「社会的意識諸形態」もまた階級性——搾取・被搾取階級の利害の背叛——によって貫かれていゝるものとみるのが至当である。

この見地からいえば、階級社会の社会的意識諸形態はその社会の現存の生産關係から利益を受けるもの——搾取階級——の社会的存在によって規定されるところの、必然に階級性をもったイデオロギーである。この階級性

をもったイデオロギーは決して搾取階級のイデオロギーとして、公然流布されることはない。搾取支配階級はその階級的イデオロギーを全人民的な社会的イデオロギーであると主張し、そのようなものにみせかけることによって、それを支配と搾取とを維持するために利用する。それで、階級社会で一般におこなわれるところの科学・哲学・宗教・道徳等は、客観的事実よりもまず階級の利益を護るべき役割をおわされている。生産力と生産関係とのあいだの矛盾が激化し、社会変革の危機がさしせまればせまるほど支配階級のイデオロギーは真実から離反し、真実をおおいかくし、真実を歪曲するような反動的性格を加えるようになる。

「ブルジョア階級は自己の哲学の党派的な性格をかくす。なぜならこの哲学は、搾取者たちの階級的利害を、すなわち人類の圧倒的な大衆の利害に対立する取るにたらない少数のものの利害をまもるからである」¹⁾

現存の生産関係から利益をうけ、その上に階級支配の土台をおくものは、生産力と生産関係とのあいだに生じた矛盾を客観的事実として、あるがままに認識すること——自己の属する階級の死滅の必然性を認識すること——は不可能である。レーニンは「没落への道にあるとき、ひとは正しく判断することができない。」といった。支配階級は結局、そのイデオロギーの支配階級の党派性のゆえに、歴史の法則についての正しい判断を失い、自ら石穴を掘る事態をまねくことになるのである。

「賃銀奴隷の社会において無党派の科学を期待することは——資本の利潤をさげることによって労働者の賃銀をたかめてはならないだろうかという問題において、工場主から無党派性を期待するのとおなじようなばかばかしいことだろう。」²⁾

ブルジョア側の側に立つものは彼らの科学、イデオロギー一般の階級性・党派性をひたかくしにかくおぼる

をえない。何故にというに、その党派性は社会の極く少数者の利益を護るという性質のものであり、したがって、大多数の人民の利益を犠牲にすることを要求する種のものである。

これに反して、プロレタリアートの側に立つものは、ブルジョアリーの科学、イデオロギーについてと同様に、彼ら自身の科学、イデオロギー一般についても、その党派性を公然と主張する。但しブルジョア・イデオロギーはその党派性のゆえに真実から隔たり、プロレタリア・イデオロギーは党派的であることによって、いよいよ正しく事物の真相を反映するものとなると説く。ブルジョアリーは階級的利益のために真実をなげすめるべく強要されるが、プロレタリアートは真実を欲求することによってのみ、階級的利益——プロレタリアート側という階級的利益とは全人民の利益である——をすすめることができる。プロレタリアは全人民を階級から解放することによってのみ、自己を解放しうる。プロレタリアートは階級そのものの廢絶をもって自己の階級的使命とする。そして、この使命を完遂するための不可欠の条件は、認識と実践との統一によって、客観的事物のうちから法則をつかみだし、この法則を自己の解放のために利用することである。それは、ひと口に言えば、弁証法的唯物論の上に自己の世界観を確立することである。

一労働者階級の階級的利益は社会発展の客観的法則性と対立しないばかりか、まったくそれと一致する。労働者階級が自分の階級的利益を実現するために徹底的にたたかうほど、ますますかれらは人びとの意思にうごかされない客観的な諸法則と一致して社会の発展をはやめてゆく。

だから労働者階級・そのイデオロギーたちは、自然および社会の発展法則をすべての面で認識すること、そして正しい、すこしのねじまげもない、哲学的な、世界の反映をあたえることを目的とする。労働者階級の利益が

哲学のうちに完全にあらわされればされるだけ、われわれをとりまく世界の客観法則はいよいよ正確に、完全に、ふかくうつしだされるであろう。」³⁾

プロレタリアートにあってのみ、その党派的理論即客観的真理、階級的利益即人類的利益となって不可分に融合する、この階級が人類の解放者と呼ばれるゆゑである。——終——

一九五五・八・一・北白川草庵にて

- (1) 前出・アレクサンドロフ著「弁証法的唯物論」五四頁
右同書 五三頁
- (2) レーニン「マルクス主義の三つの源泉と三つの成分」
右同書 五五―五六頁
- (3)

「マルクス・レーニン主義経済学は、真に科学的な経済学である。というのは、それは、労働階級と人類のすべての進歩的勢力との利益をあらわして、この労働者階級とすべての進歩的勢力とは、資本主義の滅亡と共産主義の勝利とに不可避免的にみちびく社会の経済的發展の法則を客観的に研究することに、関心をもっているからである。」（前出・ソ同盟「経済学教科書」一〇四〇頁）

「労働階級にあってのみ、ドイツの理論的性向が害われずに存続している。……労働階級の間には、地位や、貨殖や、お上みからの庇護などに対する顧慮は少しも存在しない。反対に、学問が、何物をも顧慮するところなく、何物にも囚われずに進めば進むほど、労働者の利益と要求とに一致するようになるのである。」（エンゲルス「フォイエルバッハ論」岩波文庫版・九九頁）

「所有者階級もプロレタリアートの階級も、おなじく人間の自己疎外をしめしている。しかし、第一の階級は、この自

己疎外のうちでみずから安穩と保証とを感じ、この疎外を自己に適した力として知り、そのうちに、ある人間的な生存のみせかけをもっている。

第二の階級は、この疎外のうちでみずから潰滅を感じ、そのうちに、みずからの無力とある非人間的な生存の現実をみる。この階級は、ヘーゲルの表現をもちれば、永劫の罰のうちにおいての永劫の罰への反逆であり、この反逆たるや、彼らの人間性と、この人間性の公然たる、決定的な、広大な否認である彼らの生活状態とのあいだの矛盾によって、必然的にひきおこさるものなのだ。

それゆえに、対立の内部で私有財産所有者は保守的党派であり、フロンテリアは破壊的党派である。前者からは対立維持の活動がおこり、後者からは対立破壊の活動がおこる。」（マルクス・エンゲルス選集補巻5「神聖家族」二四二頁）